

序  
章  
歴  
史  
の  
地  
層  
を  
読  
む

古来、中国文明圏の周辺に位置し、幕末以降は欧米文明の圧力を強くうけてきた日本人の自己認識は、よくいわれるように、排外主義と排外主義の両極のあいだを揺れてきた。

排外主義的発想とは、外国文明を規範とし、その受容を促進することを目指すものであり、そのため、自国の後進性が強調されることになる。このような発想と欧米起源の単線的進歩史観とが結びついたものが、戦間期の講座派マルクス主義や戦後近代主義であるということができよう。これに対して、排外主義とは、外国文明に由来するものを墮落とみなし、外国起源のものを取り除いたあとに残ると想定されるものに価値と日本のアイデンティティとを求めようとするものである。本居宣長や柳田国男という巨匠の立場でもあるため、今日の日本研究にも強い影響を与えつつけている。

排外主義にとって、克服すべき後進性と映るものが、排外主義にとっては、外国文明の影響をうけぬ、守るべき至上のものにとらえられているのであるから、起源が知れぬほど大昔から伝えられてきた不変のものが、「日本らしさ」の根幹をなすとする両説の共通了解が浮上する(一)。その永遠不変のものは、排外主義にとっては、外国文明の影響によって傷つきやすいものであり、自覚的に保存の努力をしなければ存続が危ういものであるのに対し、排外主義にとっては、自覚的にそれから逃れるべく努力してみても逃れがたいような、不滅不死のやつかいなものととらえられる、という違いがある。

このことと関連して、次のようなことも生じる。排外主義的ナショナリズムは、伝統を自覚的に守ろうとしながら、伝統とは異なるものを伝統の名において新たに創りがちであり(二)、排外

主義は、そのようにして新たに創られた伝統を旧時代から伝えられた克服すべき遺産とみなしがちになる。このようにして、両説はともに、歴史的に変化し、とくに明治維新以降の近代化の過程で形成されてきたものを、永遠不変に存続してきたものとみなしてしまうという錯誤に陥りがちであったといえよう。

両説が共に似たような誤りに陥りがちなのは、いずれも社会や文化の歴史的な変化に関して、極めて単純な図式的見方をしていることに起因するのではなからうか。排外主義、とりわけ進歩主義と結び付いたそれは、旧いものと新しいものとの対立を通して、新しいものが勝利し、旧いものにとって代わることを歴史の進歩とみなしている。それに対して、排外主義もやはり旧いものと新しいもの（この場合には、外国から入ってきたものが念頭に置かれている）との対立に着目しつつ、旧いものを守り通すことが、歴史の墮落を防ぐと考えている。このように、いずれの立場も、旧いものと新しいものとの対立を重視していることになる。

しかし、現実の歴史はそれほど単純なものではない。新しいものと接することによって、旧いものはある程度の変化を強いられるが、全く消え去ってしまうことはまれである。そして、新しいものは旧いものと調和するように調整されることによってのみ、その社会に定着することが可能となる。このように、旧いものと新しいものとは単に自己を主張し合って対立するだけではなく、相互に影響し合い、変化し合うことによって、安定的に共存しうるような均衡を旨とするのである。均衡の達成に失敗した場合にのみ、一方が他方をほぼ全面的に否定するが、そのような事態は決して一般的ではないと思われる。

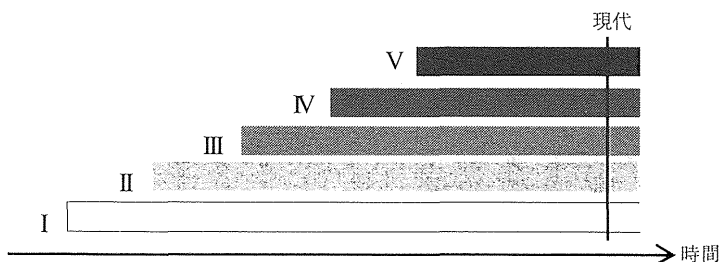


図1 地層学のモデル

このような歴史的变化は、より古いものの上により新しいものが積み重なってゆく、というイメージによって、比較的よくとらえることができる（図1、参照）。すなわち、歴史的存在としての社会や文化は、いくつかの層の重なり合ったものであり、ちょうど地球表面の歴史が地層に記録されていることと類比的にとらえることができる。より古い地層は圧力や熱などによって徐々に変質しつつも過去との連続性を保ちつつ存続すること、社会や文化においてより古いものが変化しつつ存続することと似ているといえよう。そこで、このような社会・文化のとらえ方を、「地層学」と呼ぶことにしたい（3）。

地層学的な観点から日本の特色を考えると、高度文明の周辺に位置する島国という条件は、やはり重要なものである。新しいものも多くは海外からやってくるが、たとえば異民族による征服のように、既存のものを根こそぎ否定しようとするほど強力な、新しいものの侵入は著しく困難である。その結果、古いものの上に新しいものが相互に他をある程度変質させはするものの順調に堆積し、古いものは比較的よく保存されることになる（4）。

地層の形成と同様に、新しいものの沈澱は、あらゆる時を通して

徐々に進展するとはいえ、ある限られた時期に形成された層が、相対的に非常に強い影響力を、後の時代に至るまで発揮し続けているということもある。したがって、地層学的研究は、現代に至るまで強い影響力を発揮している（ないしは発揮し得る）層を探り出し、それがいかにして形成され、以降の時代にどのような影響を与えたかを理解すると共に、今後のわれわれにとってその層の持つ可能性や意義を考えようとするものであるといえよう。

このような影響力の強い新しい層の出現としては、文明社会の形成（文明化）と産業社会の形成（産業化）との二つが、まず挙げられよう。しかも、欧米のみならず多くの諸国が産業化への離陸を達成した今日においては、産業化の具体的なありかたの多様性・多系性が、認識されるようになってきた。各社会の産業化の個性を大きく規定するものが、その社会がそれ以前にいかなる形態の文明社会を形成していたかであることも、広く認識されるようになってきている（5）。その意味で、今日の日本的な産業社会の個性を明らかにするためには、日本が産業化以前にいかなる文明社会を形成していたかについての考察が不可欠な作業である。

まず文明化および産業化に関する私の立場について、簡単に述べておくことにしたい（6）。

文明社会の対極にある未開社会の特徴を挙げておこう（7）。それは、

- (1) 剰余生産物の蓄積がなく、社会階層が未発達である。
- (2) 文字が無く、広域の安定的統治が不可能である。
- (3) 社会の規模が小さい。

の三つである。これと対照的に文明社会を特色付けると、それは、

I 剰余生産物が蓄積され、社会階層が発達している。

II 文字がある。

III 社会の規模が大きい。

の三つの条件を満たす社会といえよう。

文明化とは、一般的には、未開社会から文明社会への移行の過程であるが、三条件の変化の仕方は多様でありえ、そのいくつかは文明社会の特徴を満たしながら、残りは未開社会的であるような状態に長期間とどまり続ける社会も存在しうる。日本の場合も、弥生時代の稲作の発展によつてIは早々に満たされるようになるが、小河川や小平野・盆地に分かれているという地理的条件のため、(1)(2)は執拗に残存した。このような場合には、文明化を阻む要因が打破される以前には準未開状態にあり、打破されはじめた時点から文明化が始まったと考えることにしよう。

メソポタミア、エジプト、インダス、黄河など、大河川流域に発達した最古の諸文明のことを、アジア的生産様式とかアジア的専制と呼ぶことがある。それらは、生産手段共有という原始共同体の特色を保存したアジアの共同体の上に形成された専制国家・帝国であると考えられてきた。そのため、アジア的な諸文明は原始・未開段階の終局に位置しており、真の文明は、生産手段、とりわけ耕地の共同体による共有が崩れ、私的所有があらわれた、ギリシャ・ローマの古典古代に始まるとされることになる。

このような見方は、十九世紀西欧によるアジアの植民地化を背景として形成された考え方であり、未開的なアジアに欧米文明を啓蒙するためのものとして植民地化を正統化しようとする発想

をともなっている。マルクスやエンゲルスもこの十九世紀的常識にとらわれてしまい、事実誤認の上に、「アジア的」なる概念を構想してしまったのである（8）。

また、初期の天水型農耕においては小経営が顕在的であったが、人工灌漑が採用されると、小経営抑圧型の農業が発達し、生産性も飛躍的に向上した。ここから文明の形成へと向かったのである、大規模な人工灌漑共同体が形成されて小経営の自立性が抑圧された結果として、いわゆるアジア的専制が出現したと考えるべきである（9）。したがって、最古の文明は原始・未開的な社会構成の上に形成されたものではなく、未開的農耕社会の社会構成の否定という社会の大変革によって生み出されたものであり、未開社会の延長上にあるとする十九世紀西欧的偏見は捨てられなければならない。

前述のような偏見を継承したものに、つぎのような思想史の図式がある。「アジア的」と呼ばれる諸文明で発達した多神教的宗教思想は、人間の個としての精神的自覚が芽ばえる以前のものであり、紀元前八〇〇～二〇〇年の枢軸時代に、ギリシャの文芸や哲学、イスラエルの預言者、インドのウパニシャド、仏教やジャイナ教、中国の諸子百家の登場という精神革命が起こり、それによって人類は初めて精神的に覚醒したというヤスパースの見解である（10）。

この見解は、中国とインドを欧米文明の精神的故郷であるギリシャ・イスラエルと同格に扱った点では十九世紀的偏見から脱しており、戦中・戦後の国際政治における中国とインドの高い地位を反映しているが、欧米文明にとっては理解し難い多神教的・異教的精神に対する偏見は未だに強固に残っている。

多神教的・異教的世界観と世界宗教・哲学の世界観との間の断絶を前提とする精神革命論は、キリスト教の浸透が土着の宗教的心性をかなり徹底的に抑圧するという経験の結果、多神教的なものに対する敵意のゆえにそれに対する共感的理解ができなくなった欧米人の、自我防衛のための図式である。なぜなら、抑圧しているものを想起することは、欧米的超越観念に対する深刻な反省を促すことになり、欧米人はアイデンティティーの組み替えを強いられることになるからである。

このような欧米的見地からすると、神仏が習合し、土着の宗教性と仏教という世界宗教とが不可分の形で融合している日本の伝統的な精神性は、精神革命以前の異教的なものとして否定的にしかとらえられないことになる(一)。本書では、日本の伝統的な文明の精神的・宗教的な側面の解明にもかなりのウェイトを置くことによって、このような欧米的偏見を是正することも試みてみたい。

次に、産業化について素描してみたい。これまでの常識では、史上最初の産業社会は、十八世紀末から十九世紀初めにかけて産業革命を達成したイギリスに出現したことになっている。しかし、今日ではいわゆる産業革命の革命性は否定されるようになってきており、また、この時期に産業資本主義という新しい経済体制が出現したとするマルクス主義的な常識も否定されつつある(二)。このような最近の研究動向をふまえて、私は、イギリスのいわゆる産業革命は、産業社会以前の伝統的な文明社会段階における商工業発達の、顕著だがあくまで一つの事例にすぎないものと考えている。そして、産業社会出現を促した真の革命は十九世紀後半に生じたととらえ

たい。真の革命の原動力は、この時期に始まった自然科学の産業分野への応用である（13）。

近代において欧米の優位を決定づけたものは、ガリレオやニュートンらによるいわゆる科学革命を基礎とする高度な技術であると、しばしば論じられてきたが、啓蒙主義期以前の科学は未だにキリスト教的世界観と不可分のものであり、今日のわれわれが科学だと思っているものとは似て非なるものであった（14）。そして、キリスト教的世界観からの独立とともに、個別科学が分化して包括的世界観との結び付きが失われたために、科学的知識を手段の地位に貶めて産業分野などに応用することが可能となった。今日のわれわれが知っているような、世俗化され、分化した科学が誕生したのは、実は十九世紀半ばであった（15）。

このように、真の科学革命は十九世紀半ばに生じ、科学的知識の産業などへの応用とともに、十九世紀後半に、欧米諸国を中心として産業社会が産声をあげたことになる。

このように考えると、日本や他の東アジア諸国が開国して産業化への努力を開始した時期もまさしく十九世紀後半であり（16）、日本の伝統的文明社会からの離陸は、実は欧米諸国とほぼ同時の出来事であったことになる（17）。

かくして、産業化の開始は、十九世紀半ばの科学革命であるが、それでは、産業化が達成され、産業社会の体制が確立したのは何時であろうか。あるいは、国によってその時期が異なるとすれば、その条件は何であろうか。この点について、結論を先取り的に記しておく、先進国を含めてわれわれは未だに産業化の途上、安定的な産業社会の体制を求めて模索しているような過渡期にいるというのが、それに対する私の基本的な考えである。また、産業化が本格的に始まった時

期は、一八七〇年代以降であり、いわゆる帝国主義の時代<sup>(18)</sup>であることから分かるように、産業化は本来、国民国家を単位として考えるだけでは不十分なものであり、狭くとも地球規模の現象である。それに対して、文明化は、欧米や日本の場合には国民国家的な規模の社会の纏まりを形成することであつたわけで、そのような文明社会を形成していた欧米や日本がたまたま産業化の先頭を切つたために、一時的に、産業化とは国民国家単位の現象であるかのような印象を人々に与えたにすぎない。

以上のように、本書は、文明化と産業化の両者について、これまで常識として受けいれられてきた説とはかなり異なる立場に立脚するものである。このような新しい文明史的な枠組みをふまえたうえで、「日本らしさ」<sup>(19)</sup>に関して地層学的方法によりつつ、以下で自己反省を加えてみよう。

#### 注

1 このことは、戦後近代主義の立場から日本の歴史の底流に神道的なものを見出だした丸山真男の議論に明らかにみてとれる。丸山真男「原型・古層・執拗低音——日本思想史方法論についての私の歩み」、武田編『日本文化のかくれた形』、岩波書店、一九八四年、参照。

2 ホブズボウム、E. & T. レンジャー編、前川・梶原他訳『創られた伝統』、紀伊國屋書店、一九九二年、参照。

3 ビュフォンらによる地質学の新しい考え方が、進化論に影響を与えるなど、自然・生物・人間の歴史的变化に関するキリスト教的ドグマから脱した新しい思想の源泉になったことは良く知られている（パウマー、F・

し、鳥越沢『近現代ヨーロッパ思想——その全体像』、大修館書店、一九九二年、一九九—三〇一、四八〇頁、参照）が、地層とのアナロジーで社会や文化の歴史をとらえようとする発想は、これまで必ずしも十分に展開されてこなかったようである。たとえば、マルクスの有名な生産様式の発展段階論には、地層とのアナロジーが見られる（望月清司『マルクス歴史理論の研究』、岩波書店、一九七三年、第七章、参照）が、マルクス自身はおそらく、既に滅亡した生物の化石など、過去の遺物が層を成していることと類比的に人類の発展段階を述べようとしたものと思われる。望月の解釈では、諸生産様式は発展段階としてではなく非歴史的な類型として解釈されるべきことを地層とのアナロジーは示唆しているとされるが、この解釈は、単線の発展論の危機からマルクスの生産様式論を守ろうとするいかにも護教論的なものである。ともあれ、マルクスの地層とのえかたは、新しいものが古いものに勝利するとともに、古いものの屍が層をなして堆積するというものであり、望月の解釈は地層に関するそれとは異なる解釈を示唆している点では興味深い、全く非歴史的・共時的な彼の解釈は、地層が本来示唆している歴史的に徐々に堆積したというイメージを、切り捨ててしまう点で面白くない。われわれの地層学は、マルクスの生産様式論とは無関係（独立）のものであるが、地層とのアナロジーで歴史を理解しようとする限りで、マルクスの歴史理論を発展させたものと言えないこともない。マルクスとわれわれの地層とのアナロジーの違いの要点は、彼がいわば化石の累積をそこにみており、古いものがなお生きて影響力を振るう可能性を無視しているのに対して、われわれは、古いものが実は生きており、われわれに影響しつづつあると考えることである。新旧の弁証法的対立を歴史の原動力とする彼の理論では、われわれの論点を生かすことは至難であろう。ここにも、弁証法的歴史理論の一面性ないし限界が現れている。

4 このような論点と比較的似ているものに、梅棹忠夫の生態史観を挙げることができよう（彼の『文明の生態史観』、中央公論社、一九六七年、『日本とは何か——近代日本文明の形成と発展』、日本放送出版協会、一九八六年、参照）。彼によれば、日本と西欧は共にユーラシア大陸の辺地にあって、大陸中央の乾燥地帯から出撃する遊牧民の破壊と暴力にさらされることがなかったため、生態学で言う自成的遷移が順調に進展し、並行進化的に同じような歴史を歩み、同質的な社会を形成してきた。彼と私の見方の大きな相違点のみを、以下で簡単にまとめておく。まず、多数の人口と圧倒的に高度な文明を誇った中国は幾度にもわたる遊牧民の侵入や征服王朝を経験しながらも、かれらによって文明の蓄積を破壊されたことはなく、逆に、彼らを中国文明に同化してしまったのであるから、中国文明は遊牧民の犠牲になったとはいえない。事実、ルネサンスの三大発明

は中国と朝鮮に由来するものであり、中国文明の達成抜きに西欧文明の飛躍はありえなかった。中国に多くを負っている点で日本と西欧は共通しているにもかかわらず、彼の議論がその点を無視して、両地域の自成的遷移を強調することは支持できない。また、遊牧民のみが、ある社会が蓄積してきたものを破壊するわけではなく、イギリスを除く西欧諸国は、キリスト教とローマ法によって過去を根こぎ的に否定されている。したがって、外部からの破壊的影響を受けずに歴史を展開してきたものとしては、西欧のなかではイギリスのみしか挙げられないし、アジアでは日本のみならず N I E S、A S E A N、中国を、程度の差はあれ、挙げるべきである。この点ではなからうか。さらに、生態学的遷移とのアナロジーもやはり、新しいものが古いものを否定するという発展段階論の図式には馴染むものの、旧いものと新しいものとの重層をとらえるのには不適切である。

5 たとえば、S・N・アイゼンシュタット、梅津・小林・田中・柳父訳『文明形成の比較社会学』、未来社、一九九一年、参照。

6 詳細は、平山朝治「比較経済思想序説——マルクス、ウェーバー、ハイエクを超えて」、同著『比較経済思想』、近代文藝社、一九九三年、四 文明化と産業化、参照。

7 ここでは、社会人類学の標準的なテキストである、中根千枝『社会人類学——アジア諸社会の考察』、東京大学出版会、一九八七年、五三頁以下による。

8 小谷汪之『マルクスとアジア——アジアの生産様式論争批判』、『共同体と近代』、青木書店、一九七九・八二年、参照。

9 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』、岩波書店、一九八九年、第五章、終章、参照。

10 ヤスバース、K、重田訳『歴史の起源と目標』、理想社、一九六四年、参照。この思想史の図式は私が学んだ高校の倫理社会の教科書でも採用されていたものであり、かなり普及しているようである。アイゼンシュタット『文明形成の比較社会学』も同様の見解を採用している。

11 アイゼンシュタット『文明形成の比較社会学』、七三頁、参照。

12 このような研究動向は、川北稔「揺れる『産業革命』像——英国で否定論が大勢に アジアからの視点必要」『朝日新聞』、一九九二年、六月九日夕刊、などで広く紹介され、専門家以外にも周知の事実となりつつある。

13 このような見方は、K・E・ボールディング（たとえば、猪木他訳『社会進化の経済学』、H B J 出版局、一九八七年、第4章、参照）や、D・C・ノース（中島訳『文明史の経済学——財産権・国家・イデオロギー』

春秋社、一九八九年、第一二―三章、参照)が、おそらく独立に、唱えている。私も両者の説を知る以前から同様のことを考えていた。

14 村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』、新曜社、一九七六年、参照。

15 村上陽一郎『科学のパラダイムと宗教のパラダイム』、『情況』、一九九三年一月号、参照。

16 杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』、『社会経済史学』、五一巻一号、は、十九世紀後半のウェスタン・インパクトに対する反応として、インド、日本、中国、東南アジアの四地域の分業というアジア間貿易が著しく発展したことを明らかにしている。このことも、産業化に関してアジアが必ずしも立ち遅れていなかったことを示唆している。

17 このことはポールディングがいちはやく指摘していた(K・E・ポールディング、岡本訳『組織革命』、日本経済新聞社、一九六七年、「日本語版への序文」、参照)。

18 私はここで、マルクス主義の帝国主義論を肯定しているわけではない。帝国主義論は、一八七〇年代になってマルクス経済学が現実と合わなくなってきたと指摘した修正主義に対する正統派的解答としてマルクス主義に採用され、その内部で発展したものであり、十九世紀前半のイギリスの産業資本主義と一八七〇年代以降との間に、資本主義としての連続性を前提しつつ、段階差を設けることで、一八七〇年代以降の変化に対応しようとしたものであるから、世界史上最大の歴史的断絶ないし革命の一つである産業化への離陸の認識を妨げるものである。私見によれば、マルクスやウエバーの産業資本主義ないし近代資本主義像は、イギリスの経験に対するドイツ的偏見に彩られた事実誤認に基づいている(注6で挙げた拙稿、参照)。帝国主義論のみならず、彼らの資本主義論は、歴史の現実を理解する上で大きな障害となってきたものであり、全般的かつ根本的な見直しが必要である。

19 「日本らしさ」という表現は、濱口恵俊『「日本らしさ」の再発見』、講談社学術文庫、一九八八年による。